



ワーグナーという



文・田辺とおる

「オペラは一六〇〇年、関が原の合戦の頃、イタリアのフィレンツェで誕生した」と音楽史の時間に教わる。しかし現代のオペラハウスの定番は、十九世紀から二十世紀初頭までに完成した作品プラス十八世紀末のモーツァルトと言っている。つまり今日の我々にとつてのオペラとは、基本的に十九世紀の芸術だ。そしてその旗手がイタリアのヴェルディとドイツのワーグナーで、奇しくも一八一三年生まれの同い年。

この二人、いろいろな意味で対照的だ。ヴェルディは貧乏宿の息子に生まれて若い頃からお金の苦労をした上、下積み時代に最初の妻と子供を亡くす悲劇にも見舞われた。その為か、成功した後しばらくは本人が「使役船の時代」と回想するほどの自転車操業で注文に答え、今日の劇場界では忘れ去られた十作以上の「初期の作品」がある。中・後期の名作群をあわせて約三十曲のオペラを書いたが、ギヤラ交渉も全て自分でやり、終生「暮らしのために」作曲した。財産は専ら農地で、北イタリアのパルマ近郊から離れず、作曲料が入る度に買い足した。

ワーグナーも貧乏はしている。しかしこの人は生涯、他人の財布で暮らした。借金踏み倒してリガの劇場から夜逃げし、パリの屋根裏で写譜屋をしながら糊口を凌いだ時代に「もう生活の為に音符を書かない」などと宣言

してしまう御仁だ。実際一八八三年に亡くなるまで、それを貫いた。無類の浪費家で恋愛もジコチュー。パトロンの家に居候しながら奥様とイイ仲になっては一曲書き、新婚旅行で立ち寄った弟子の新妻を失敬して（後年には）子供も作り離婚させては一曲書く。パトロンを渡り歩いた人生の末に、バイエルン国王という飛び切りのパトロンの庇護を受け、さらに晩年には、自分のオペラを上演するには専門の劇場が必要だ、と言い出してバイロイトに豪華な屋敷を建てて移り住み、劇場も作ってしまう。

作風は、多分に麻葉的だ。ワーグナー狂いを「ワグネリアン」と呼ぶ。本人もワグネリアンに囲まれた一生を送ったが、没後の音楽界に与えた影響も比類ない。作曲家も演奏家も聴衆も、極端に言えばワーグナー以降の時代では必ず「ワグネリアン」か「アンチワグネリアン」に分けられるだろう。無関心を貫くことは不可能。つまり、麻葉だ。

完成したオペラは、四夜連作の「ニーベルングの指輪」を四つに数えて十三曲。しかしほとんどが通常のオペラの二倍以上の長さだから、書いた小節を数えたら、約三十曲のヴェルディや、約二十曲のモーツァルト（三十五歳の短命だから凄いなことだが！）にも十分に匹敵するだろう。

しかも両者とは異なり、台本を全部自分で書いている。出典は神話・聖書・伝説・古典文学

など、縦横無尽。どのくらい自由かというと、ケルト神話を聖書の登場人物に演じさせたり（パルシファル）、古代ドイツの叙事詩を北欧神話とくっつけたり（ニーベルングの指輪）、和音もない程単純な中世の歌の世界と絢爛豪華な自らの作曲技法をくっつけて超大作に仕上げたり（マイスタージンガー）、なにしろ別世界をくつつけちゃうのである。そして、原作の何十倍も華麗な歌絵巻に仕上げているのだ。そう、「豪華」はワーグナーに象徴的なキーワードと言っている。

オペラ＝歌劇とは、文字通り歌・管弦楽・演劇・舞台美術の融合体なわけだが、普通はどうしても「歌」に重心が傾く。管弦楽は「伴奏」、演劇は「付け足し」という印象が否めないオペラは少なくない。台本から作曲、そしてバイロイトで上演した「ニーベルングの指輪」「パルシファル」初演においては音楽監督から演出まで自ら手を下したワーグナーは、融合体としてのオペラというものを実践した随一の巨匠だろう。

その「パルシファル」。ワーグナー最後のオペラだ。麻葉ここに極まりの感深い、圧倒的な名作。ドイツの劇場人にとっては特別な作品で、今回の「あらかわバイロイト」公演を作ってくれる演出のピオンテック、指揮のハンマーも、東京で日本人と「あの」パルシファルを制作することに絶大な期待を寄せている。荒川から発信するオペラ意欲作として、二〇〇八年五月のシヨスタコーヴィチ作曲「ムツェンスク郡のマクベス夫人」（ロシア語舞台・日本人初演）に続く第二弾。今後「あらかわ」は、東京におけるドイツオペラのメッカを目指す。これは見逃せません、よね？



■たなべ・とおる

ドイツの「北ハルツ劇場」専属歌手としてオペラからミュージカルまで出演した後、ベルリンで俳優業にも活動を広げる。映画「ラストサムライ」では渡辺謙の声を吹き替え（独・仏・西語）・ドラマ・CM・ベルリン・シエークスピアカンパニー「十二夜」などに出演。二〇〇〇年以降は新国立劇場をはじめ、日本のオペラにも多く出演し、モーツァルト・ワーグナー・Rシユトラウス・ドニゼッティ・ロッシーニ・ヴェルディ・プッチーニなどの諸作品で好評を博した。NHK音楽番組からバラエティーまでテレビ出演も多い他、雑誌連載や楽譜編集でも健筆を揮う。国立音楽大学講師。東京二期会会員。
www.tanabe.de